

関宿城博物館周辺の植生について (1)

岩槻秀明

(1) はじめに

関宿城博物館は、利根川と江戸川の分流点付近に位置し、館の4階展望室にのぼると、眼下に首都近郊とは思えないほどの河川敷の豊かな緑が広がっている。

この利根川・江戸川分流点付近の緑を構成する植物にはどんなものがあるのか、私は長年にわたって歩きながら観察してきた。

河川敷という場所はもともとかく乱が激しく、そのたびに植生が刻々と変化したりするが、とりあえずいったん文章としてまとめてみることにした。

今回から2回にわたって、関宿城博物館周辺の植生について、エリアごとにまとめてみたいと思う。本稿では、そのうちの博物館の周りの植生をまとめておきたいと思う。

(2) 関宿城博物館周辺のエリア分け

博物館周辺と言ってもかなり漠然としているので、エリア分けし、エリアごとの植生の状況をまとめることにした。博物館周辺の略図を図1に示す。A～Kまでのアルファベットが振られているが、これが今回報告するエリアである。うち、AとBはランドマークで、Aは関宿城博物館の建物、Bは中の島公園である。

赤い線は道路で、実線が舗装されているもの、破線がダート(砂利道)である。河川敷内のダートについては、地図をもとに歩き、確認できたもののみを記してある。

なお、最近河川工事のための工事中の道路(舗装されたもの)がつくられているが、図1にはそれは反映されていないのであらかじめご了承ください。

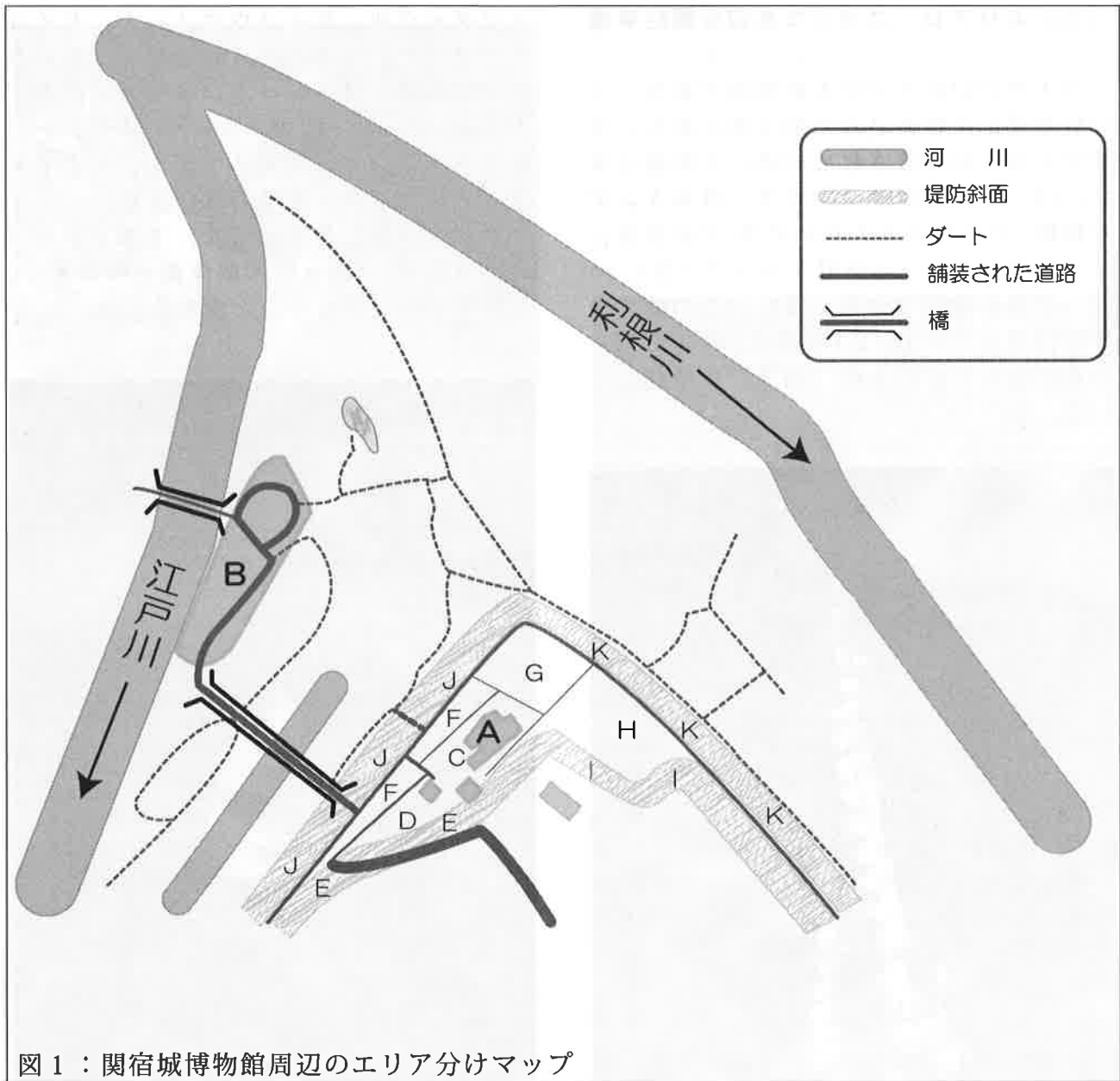
E、I、J、Kのエリアは、黄橙色で細長くハッチがかかっている場所に相当するが、これは、堤防の斜面である。以下、各部分について具体的に見ていくこととする。

(3) エリアC 博物館駐車場

図1のCは、博物館の駐車場を指している。博物館駐車場は舗装されているので植物はほとんどないが、駐車場から博物館への正面入り口に向かって、タイルが敷き詰められている部分があり、タイルの目地に植物が見られる。ここでメインとなって生えているのはアライトツメクサ(註1)(図2)で、外来種ながらも千葉県では比較的珍しい。アライトツメクサの他には、ツメクサ、トキワハゼ、タチチチコグサ、コニシキソウ等を確認している。



図2：アライトツメクサ (2007.5.12 撮影)



(4) エリアD ニコニコ水辺公園駐車場

図1中のDのエリアも駐車場である。この駐車場には植え込みが何ヶ所もあり、ヤマモモなどが植栽されている。この植えますには、ウラジロチチコグサ、外来タンポポ種群、アオスズメノカタビラ、ツメクサ、ニワゼキショウ、ニワゼキショウ(白)、ハマスゲ等が確認できる。また、この植えますにはネジバナ(註2)が多く、時に白花、白花になりかけのもの(図3)を確認している。



図3：白花になりかけのネジバナ
(2006.6.28撮影)

(5) エリアE 江戸川堤防陸側斜面

境大橋の袂に入り、農道をひた走った後、農道は堤防をのぼり、堤防上の関宿城博物館へとアクセスするようになっている。そのアクセス道路がある側の斜面がEである。

Eでは、キュウリグサ、スズメノヤリ、

トウダイグサ、セイヨウナノハナ、セイヨウアブラナ、スイバ、ヒレアザミ、カントウタンポポ、ウスジロカントウタンポポ、カラスノエンドウ、カスマグサ、ノヂシャ、ホトケノザ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、イヌムギ等が見られる。

特筆すべきこととしては、スズメノエンドウ(註3)(図4)の個体数が特に多く、大群落を作っていることである。



図4：エリアEを象徴するスズメノエンドウ
(2008.3.25撮影)

また、エリアEに見られる外来タンポポ種群は帯化(註4)現象を起こすものも多い。



図5：エリアEで見られる外来タンポポ種群の帯化（2004.4.11撮影）

（6）エリアF 関宿ニコニコ水辺公園

エリアFとエリアGは関宿ニコニコ水辺公園である。そのうち、エリアFは樹木が多数植えられて散策路が作られている場所と、遊具がある砂地の裸地となっている場所に分けられる。樹木が多数植えられている場所の植えますには、ミチタネツケバナ、キュウリグサ、ツボミオオバコ、オオバコ、ニワゼキショウ、ニワゼキショウ（白花）、外来タンポポ種群を確認している。また、散発的に河川敷固有種のミゾコウジュの発生も確認している。

このエリアは定期的に草刈が行われていることと、人の踏み付けから、各野草群の草丈が低くなっているのが特徴である。また、植栽の樹木にヘクソカズラのツルが絡まっている姿もよく見かける。FエリアとJエリアの境界にはサイクリングロードが走っているが、サイクリングロード沿いになると少々植生が変化し、イヌムギ、ネズミホソムギ、カモジグサ、アカツメクサ、ヘラオオバコ、カタバミ等、Jエリアで見られる種が入り込んできている。

また、遊具が多い裸地となっている場所は砂ベースであり、またかなり踏み付けられているため、草丈はかなり抑えられているが、ミチタネツケバナ、オオバコ、ツボミオオバコ、ヘラオオバコ、キュウリグサ、ナズナ等踏み付けに比較的強い種類が見ら

れる。また、ミゾコウジュ、コイヌガラシ等の河川敷固有種が時々出現する。

それから、ここでは春にはイヌナズナが群落を作っている。イヌナズナ（註5）（図6）は都市化を嫌う雑草であり、近年は数を減らしつつあるが、博物館周辺ではまだ比較的多く見ることができる。



図6：イヌナズナ（2006.3.28撮影）

（7）エリアG 関宿ニコニコ水辺公園

エリアGはゴリラなどのオブジェがある場所である。ここは草地となっており、定期的に草刈が行われている。見られる植物としては、アオスズメノカタビラ、ニワゼキショウ、ニワゼキショウ（白花）、オオニワゼキショウ、ウラジロチチコグサ、ネジバナ、外来タンポポ種群、イヌムギ、ムラサキサギゴケ、トキワハゼ、オオバコ等が見られる。

ただ、このエリアは特段特徴的なものは見られなかった。

（8）エリアH 水辺公園横広場

エリアHはスーパー堤防上の草原であるが、意外に湿気が多く、ぬかるんでいることもある。そのため、ムラサキサギゴケ（註6）（図7）、オヘビイチゴ等湿った草原に生えるような植物が5月に群落を作っている。ミゾコウジュも出現するが、草刈の影響か、なかなか花が咲くまでにはいたっていない。

その他、コメツブツメクサ、シロツメク

サ、外来タンポポ種群、ハルジオン、スイバ、オランダミミナグサ、シバ、ギシギシ類が群落を作っており、4～5月頃の外来タンポポ種群とシロツメクサ、ハルジオンの群落は圧巻であった。



図7：ムラサキサギゴケ（2008.4.12撮影）

(9) エリアI 利根川堤防陸側斜面

エリアIは、堤防上であるエリアHの陸側斜面に相当する。ここには、セイヨウアブラナやギシギシ類、スイバ等背の高い植物が散在する他、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、カスマグサ、コメツブツメクサ（註7）（図8）、シロツメクサ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、ナズナ、オオイヌノフグリ、オランダミミナグサ等が見られる。

また、このエリアにはヨーロッパ原産の外来種であるハナヤエムグラ（註8）（図9）がかなり前から入り込んでいる。



図8：コメツブツメクサ（2008.4.12撮影）



図9：ハナヤエムグラ（2008.4.12撮影）

(10) エリアJ 江戸川堤防川側斜面

エリアJは江戸川堤防の川側斜面である。ここは主に外来種が中心となっており、ヘラオオバコ、エゾノギシギシ、アカツメクサ、アメリカネナシカズラ、外来タンポポ種群などを確認している。またカモジグサ、イヌムギ、カニツリグサ、エノコログサ、

キンエノコロ、ムラサキエノコロ、ネズミノオ、種類は特定していないがイチゴツナギ属の外来種等のイネ科植物も多く見られる。

ここの特徴としては、セッカツメクサ(註9)、それから、花色が薄いタイプのアカツメクサがよく見られることである。

その他、ヘクソカズラ、ツユクサ、カタバミ、ノチドメ、カントウタンポポ、ウスジロカントウタンポポ、イヌナズナ、ホトケノザ、コヒルガオ等を確認している。

斜面の最下部はやや湿っており、ネジバナやニワゼキショウ、オヘビイチゴ、ミコシガヤ、ツルマメ、キキョウソウ、ヤブジラミ、ワルナスビ、ミゾコウジュ、ハルシヤギク、ヒロハウシノケグサ等を確認している。

(11) エリアK 利根川堤防川側斜面

エリアKは利根川堤防の川側の斜面である。エリアJと似たような植生で、アカツメクサ、セッカツメクサ、エノコログサ、キンエノコロ、ムラサキエノコロ、スイバ、外来タンポポ種群等を確認している。また、斜面上部には在来種のクマツヅラ(註10)の姿も見られる。

最近、斜面下部のアカツメクサに寄生しているのか、アメリカネナシカズラ(註11)(図10)の数が増えたように思う。



図10：アメリカネナシカズラ
(2007.7.7撮影)

(12) おわりに

人の出入りが激しいところなので、やはり帰化植物が圧倒的に多い。アライトツメクサやハナヤエムグラといった、比較的珍しい外来種の姿もある。また、セッカツメクサが多いというのも特筆すべき事項だと思う。

今回報告対象としたエリアはすべて管理された場所であるため、定期的に草刈が行われることから草丈は低めで、セイタカアワダチソウ等がはびこって藪を作っているような場所はない。また、人の往来が激しいため、踏みつけに強いツメクサ、オオバコ類、シロツメクサ等が非常に多い。

一方で、コイヌガラシ、ミゾコウジュなどの河川敷固有種、それから、スズメノエンドウやカスマグサ、イヌナズナ、ネジバナ、ムラサキサギゴケ等、里地の在来種も残されており、今後これらがどのような推移をたどっていくか見守る必要がある。

今回は本当の意味での博物館周辺をまとめたが、次号では、河川敷内及び中の島公園の植生についてまとめてみたいと思う。

今回の調査は主に2005年～2007年にかけてのもので、目視と写真記録によって行った。今後の課題となるが、なるべくさく葉標本による証拠記録を残していきたいと思う。

また、植生は今後も刻々と変わっていくと思われるし、まだ調査不足のエリアも多い。今後も継続して植生調査を行っていきたいと思う。

〔註〕

(1)アライトツメクサ(*Saginaprocumbens* L.) ヨーロッパ原産の1年草。在来のツメクサに似るが、花は4数性。また、花卉は通常退化していることが多く、ガク片が目立つ。

(2)ネジバナ(*Spiranthes sinensis* (Pers.) Ames var. *amoena* (M.Bieb.) H.Hara) 芝地によく見られる身近なラン。花は赤紫色で穂状にらせん状につく。時に白花種があり、それはシロモジズリという。

(3) スズメノエンドウ (*Vicia hirsuta* (L.) Gray) マメ科ソラマメ属の1年草で、野原や草地、道端に自生する。カラスノエンドウの仲間だがそれより小型で、白い小さな蝶形花が1つの花柄に数個つく。

(4) 綴化または石化とも言う。本来棒状になる茎や花茎が、扁平に幅広くなる現象。キク科植物に多く、生長点がなんらかの原因で傷つけられて発生すると考えられる。

(5) イヌナズナ (*Draba nemorosa* L.) アブラナ科イヌナズナ属の1年草。ナズナに似たスタイルだが、黄色い花を咲かせることと、果実がハート形ではなく楕円形になることなどが異なる。「都市化を嫌う雑草」と言われ、個体数が減少している。

(6) ムラサキサギゴケ (*Mazus miquelii* Makino) 湿った草地に生える多年草で、地面を這うように広がる。春～夏にかけて、紫色の花を多数つける。

(7) コメツブツメクサ (*Trifolium dubium* Sibth.) ヨーロッパ原産の1年草で、シロツメクサ等と同じ仲間だが、はるかに小型で黄色い花を咲かせる。堤防には多い。

(8) ハナヤエムグラ (*Sherardia arvensis* L.) ヨーロッパ原産の1年草。草姿はヤエムグラに似ているが、5月以降桃色の花を咲かせる。

(9) セツカツメクサ (*Trifolium pratense* L. f. *albiflorum* Alef.) シロバナアカツメクサとも言う。アカツメクサの白花種。

(10) クマツヅラ (*Verbena officinalis* L.) クマツヅラ科クマツヅラ属の多年草。道端や野原に普通とされるが、私が観察している限りそんなに多いものではない。もともと普通に見られたものが減少しているのだろうか。

(11) アメリカネナシカズラ (*Cuscuta campestris* Yuncker) 北アメリカ原産の1年草の寄生植物。根、葉、葉緑素共に持たず、他の植物に絡みつきながら栄養を吸い取って生活している。外来生物法要注意種。

(いわつき・ひであき 当館展示協力員)